

共同体のなかの自分史

——北海道東藻琴村生涯学習講座での取り組み——

藤 井 美 穂

I. はじめに

自分史がブームであると言われて久しい。その盛況ぶりは衰えをみせず、社会現象として定着したといえよう。多くの自分史が書かれ出版されている。テレビや新聞などのマスコミで取り上げられることも少なくない。自分史講座は、民間の文化教室で定番講座となっており、公民館活動や生涯学習など公立の講座でも自分史は盛んに取り組まれている。通信制の NHK 学園は、1987 年に自分史講座を開設しているが、受講生はこれまでに 1 万 6 千人を数えた。自分史の書き方を手引きする書籍も多数出版されている。また自分史を対象とした賞が創設され、多数の応募がよせられている⁽¹⁾。1998 年に改訂された『広辞苑』第 5 版には、はじめて「自分史」が項目として収録された。「平凡に暮らしてきた人が、自身のそれまでの生涯を書き綴ったもの、自伝」と定義している。

「自分史」という言葉は、1975 年に色川大吉が自らの著書のなかで用いたのが最も早いとされている。色川は、橋本義夫の主催する「ふだん記」と名付けた「庶民の文章運動」と関わっていく。その過程で、自分史を通じて近代日本史を描こうとしたのが先の著書である。またそのなかで橋本とその「ふだん記」についてふれたことから、その運動を広く世に知らしめることになる。自分史は、この「ふだん記」運動が先駆けとなり、1980 年代に「ブーム」といわれる状況をつくりだし、1990 年代以後も盛んな取り組みが続いているの

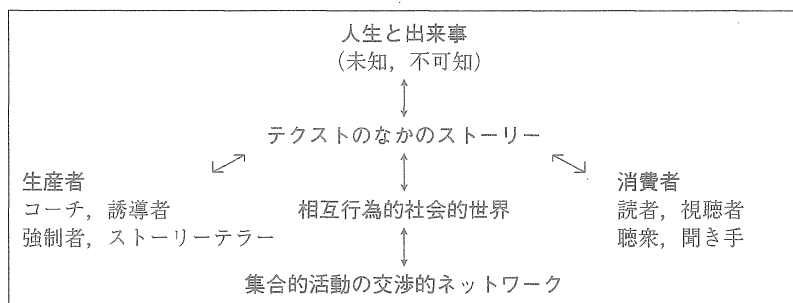
である。

自分史は、社会科学の研究対象ともされてきた。自分史に早くから着目し、自分史という社会現象に取り組んだ研究として、小林の一連の論考がある。小林は、「ストーリーの社会学」の視点を自分史に適用している。プラマーの標榜する「ストーリーの社会学」では、「ストーリー・テリングの行為を共同行為として社会的関係においてとらえなおしてい（プラマー 1995）」こうとしている（第1図）。この論点から自らの人生を自分史として表現することを「人生の物語」という「ストーリー・テリングの行為」として把握するのである。ストーリーが生産され受容される社会的関係を問うことで、その現象を分析している（小林 1997 a）。

そこで指摘された自分史の分析視点の一つが、共同体への着目である。自分史の作成過程で共同体が形成され、その共同体が自分史を成立させる重要な背景となっていることを明らかにしている（小林, 1997 b; 1998 b）。

人生を物語るテキストとしての自分史をつくるのは、ただ単にその書き手だけではない。書き手の私的な経験が綴られていても、その自分史は書き手からもその経験からも独立した存在である。その自分史の生産者と消費者、それらの関係性から立ち上がってくるのである⁽²⁾。

本稿では、自分史を「社会関係から生まれるストーリー」と認識することにより、自分史作成の主体となる「共同体」の存在に関心を向けながら、自分史



第1図 共同行為としてのストーリー

プラマー『セクシュアルストーリーの時代』1998, 46 頁

作成の状況と背景を、北海道東藻琴村の生涯学習講座で取り組まれた自分史活動から考察する。

Ⅱ．東藻琴村の自分史

(1) 東藻琴村『自分史』について

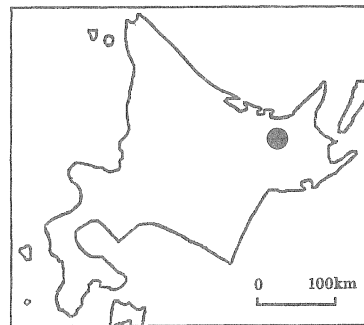
北海道網走郡東藻琴村は、北海道東部に位置して、網走市に南接する人口2,939人（1995）の村である。藻琴山が、オホーツク海にむかって緩やかに傾斜する北麓を占めている。畑作地と牧草地の風景が続き、農業が村の基幹産業となっている。

東藻琴村では「寿大学」と名付けられた生涯学習講座が1975年に開設された。村と教育委員会が実施主体となり、60才以上の村内在住者を対象者としている。毎年4月に新学期がはじまり、開講日は月二回である。開設以来、毎年100人近い受講者がある。

自分史は生涯学習講座の一環として、1985年から取り組まれた。その成果が、1988年と1995年に発行された自分史の文集である。1988年の文集には43人43編（男性14人、女性29人）、1995年の文集には、19人19編（男性2人、女性17人）の自分史がおさめられている⁽³⁾。それらは、分量⁽⁴⁾、文章力の優劣、そしてそこに書かれた内容まで一様ではない。

(2) 「人生の物語」を構成するもの

「人生の物語」にはいったい何が綴られたのであろうか。一般に自分史の書き方には、特定の出来事や経験について記述したものと、おおよそ時間軸にしたがって記述したものに大別できる。この自分史文集では、特定の出来事を取り上げたのは、4編だけであ



第2図 東藻琴村

る。いずれも男性で、戦争体験を書いている。

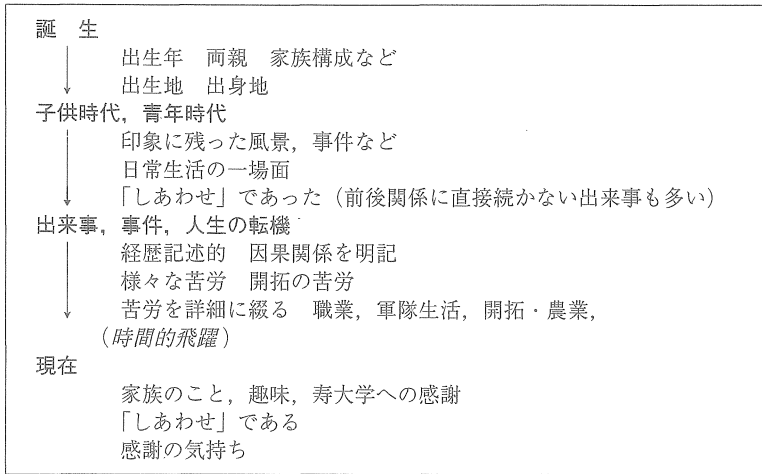
この4編以外は、時間軸にそって書かれている。自分の生い立ちから現在までを記述の範囲としているものが大多数である。この書き方では、自分の誕生から書き始められ、子供時代がそれに続く。多くの自分史が、幼少期、学童期の思い出にふれる。記憶に残る出来事の他に、日常生活の光景が描写される。牧歌的に表現される傾向をもつ。また子供時代を「恵まれていて」「しあわせ」であったと評するものも少なくない。続く青年期の思い出も同様の記述の特徴がみられる。

それ以後の人生は描かれ方が変化する。人生の節目や転機、事件などの出来事が因果関係を明確にしてつながれていく。非日常的な出来事がとりあげられて、子供時代のように日常の一場面が描写されたりすることはまれである。それらの出来事のいくつかは詳しく記述され自分史の中心となっている。

物語の中心となる人生の重大事件のあと時間的な飛躍があつて、現在の記述がはじまる。今の生活の様子にふれ、その説明として必要な近年の出来事がそえられる。そして今を「しあわせ」であるとし、その具体的状況として「孫の人数（が多いこと）、趣味を楽しんでいること、寿大学に参加できること」などをあげる。そして感謝の言葉を結語として自分史が締めくくられる。共通するこれらの傾向は、東藻琴村の自分史文集の基本のフォーマットとして把握できる（第3図）。自らの人生の無限の表象の可能性のなかから、筋立てを選び出すよりどころとして機能していると思われる。また以下の点が自分史のなかで詳しく記述され強調されていることが注意を引く。

・出身地

生い立ちの記述では出生地にもふれられるが、そこに「内地」へのこだわりが見える。この生涯学習講座の参加者には、北海道外から北海道へ、そしてこの東藻琴村へと移住した経歴を持つ人が多い。したがって道外の出生地が記される。さらに北海道生まれの人の場合は、自らの出生地を明記するだけでなく、両親、祖父母までさかのぼって「内地」の出身地を明記する。そのこだわりは北海道移住という経験をふまえての、出身地への関心であろう。たとえ自



第3図 基本のフォーマット

分に渡道経験がなくとも、自らをそのように認識しているのである。

・苦勞

描かれる出来事には、「苦勞」の経験が多い。多様な苦勞の経験が詳細な記述とともに強調される。自分史に取り組んだ人たちが、「激動の時代」を経ており、実際に苦勞が多かったという直接的な背景も考えられよう。しかし、「おもしろ、おかしい」ことの記述が、成人以後の出来事にほとんど見られず、子供時代の記述に限定されてみられることから、「苦勞」の記述は物語を形づくる重要な筋立てとされていることが分かる。

「苦勞」の記述は、書き手の一人一人がなした人生での業績であり、困難を克服してきたサバイバーとして誇りであり、自負の表出であろう。「しあわせ」とは、その「苦勞」を乗り越えた現在に限定されて用いられる表現となるのである。

・開拓

「苦勞」の一つに「開拓」の苦勞がある。「開拓」にまつわる苦勞が多く取り上げられ詳しく述べられる。農地を切り開いていく苦勞、農作業の苦勞、冷害風害の苦勞、家畜導入の苦勞、そのころの日常生活の苦勞などが「開拓」の苦

労として描かれる。これらは「開拓」を人生の業績としての価値を認めるゆえの記述であろう。そのことは、入植経験者がその経緯を詳しく記述することにも見て取れる。入植を決めるまでの経過、渡道時の旅程、その時の家族の人員、入植の詳細な手続き、入地直後の生活、農業が軌道にのる過程などである。

「開拓」を記した多くの例から、「開拓」に付された意味に2つの次元があることが分かる。一つは、非農耕地を農地へ転換していく具体的作業としての開墾の意味である。もう一つは、移民として入植し「開拓」して、地域を作り上げたことである。具体的作業と共に、地区の開祖としての象徴的意味の開拓である。自らが初代として入植し、開拓作業に加わったひとは、開墾作業の「開拓」で地域を開いたことを記す。現在ではこの経験を持つ人は極めて少なくなっている⁽⁵⁾。自らの入植経験を持たない人も、前者の畑地造成作業としての意味の「開拓」の状況を記す。しかし、この開拓の2つの意味は区別されておらず、どちらも地域を切り開いた象徴的意味付けがなされている。

自分史という物語の筋立てを助ける基本のフォーマットの存在や、取り上げられ記述される事がらとその価値付けの共通性などが認められる。自分史を作成した各々の書き手が、それら価値観を共有することで一体感を持ち得たのである。その共有された認識に基づいた自分史作成であり、書き手たちを共同体へとまとめているのである。二冊の自分史文集からは以上が明らかであるが、次に文集がつけられる背景やその過程を考察する。

Ⅲ.『自分史』を取りまく社会関係

(1) 自分史作成作業

自分史の取り組みは、3年間の計画で始められた。1年目に「自分史」の意味、書き方の講義を受け、2年目に実際に作文作業を行い、3年目に文集に編集された。講義と指導は、教育委員会の職員と村立東藻琴高校の教諭が担当した。自分史を書くということは、生涯学習講座参加者にとってそう容易なこと

ではなかったようである。自分史を書く強い意欲をもった人がいると同時に、「考えただけで頭が痛くな」といった反応する人も少なくなかったという⁽⁶⁾。自分史作成を担当した菊地慶一⁽⁷⁾さんは、その指導と作成の様子を次のように述べる⁽⁸⁾。

「さあ、書きましょう」といって書けるものでないという。「私には書くことなどない」となってしまうたり、また書く意欲のある人も、自らの経歴を並べただけの履歴書のような自分史になってしまうりするようである。書く意欲をひきだすことが最も重要であり、書こうという「気持ち」さえあれば、大体書けるという。そのために、「平々凡々なことが重要で価値のあること」を何度も繰り返して強調する。

作業は、話すこと、聞くことから始めて、その後書く作業へと進めていくという。話すこととは、各自が「自己紹介」や「自分のこれまでの歩み」を述べあい、そして同時にお互いに聞くのである。これを何度か重ねるうちに、書けない、話すことがないといっていた人も、話せるようになる。その段階を踏むと、書き始められる。また、どうしても話せない書けない人も、「聞く」ことで自分史の活動に参加していることを認めることも大切であるという。

この作文作業が、完成した自分史の内容に影響を与えていることは明らかである。「書くことがない」と思っていた人が、他人の話を聞く過程で、自らの筋立てを発見していく。自己の表象の一つのありようを、「聞き」「話す」過程から獲得したといいかえることができよう。その獲得は、話者として聴者としてすべての講座参加者と、「第二の生産者（プラマー 1995）」である講座の担当者によってなし遂げられたのである。

(2) 自分史を取りまくテキスト

生涯学習講座ではこの他にも文集が編集されている。その一冊が1977年に編集された『私の開拓の歩み』である⁽⁹⁾。『私の開拓の歩み』は村内の郷土史研究グループが生涯学習講座受講生と共同で「開拓」をテーマに編集したものである。開拓の経験を、本人の作文や、聞き書きでまとめられている。

テーマの「開拓」に即した内容となっている一方で、自分史文集の内容との類似性が高い。先の基本のフォーマットとして把握できる文章も多い。書き手（話者）の誕生から始まり、東藻琴村への移住の経緯や状況にふれ、「開拓」や「苦勞」を取り上げそして、結びには今の状況への感謝が添えられる。「開拓」にまつわる出来事の他に、個人的な「苦勞」が多く取り上げられている。『私の開拓の歩み』は、自分史に先行して同様の特徴をもっているのである。

また村内で編集された文集に、「部落史」がある。「部落史」とは地区内の有志が著者、編者となり、地区の最初の入植から現在までの歴史をまとめたものである。村内の下位区分は、拓殖事業の進展の過程で用いられた区画をおおよそ受け継いでいる。入植者の受け入れのために成立した地域区分である。それゆえ最初の入植者から地区が始まり、それが地区の「開基」とされている。部落史に開基と開拓の記述は不可欠の要素であり、冒頭に掲げられる。初代入植者がはじめて「鋤をおろした」行為は地区創造の意味をもち、記述されるべき、讀えられるべき出来事なのである。そしてそれにつづく開墾の営為が現在の地区を作り上げたことを記そうとしているのである。生涯学習講座の参加者には、部落史の編集に携わったひとが少なくない。

「開拓」「入植」「開基」などを、記述する出来事として認識している自分史文集の筋立ては、自分史に先行して編集されたこれらの文集から受け継いでいる。それは、『私の開拓の歩み』や「部落史」という物語の作成時に成立した共同体の社会関係が、自分史作成時に成立する共同体に影響をあたえ、その一部を形成しているためである。自分史に、先の文集に記述した同様の内容を繰り返している書き手もいる。これも、単に繰り返されたのではなく、それぞれのテキストの成立主体となる共同体が密接な関係をもつためである。自分史に何が記述されるかは、自分史講座の参加者たちの相互行為のなかで選びだされると同時に、その講座を取りまいて外部の社会関係との相互行為のなかで、吟味されているのである。

その一端は、自分史の文集に添えられた序文、末文からうかがうことができる。「1人1人の歩んだ道の中で共通しておりますことは、たくましい開拓者

精神、創始者としての自主独立と根性、自治自敬の心が横溢しており……喜怒哀楽と辛苦欠乏に耐え抜いた人間の生きざまがあり……⁽¹⁰⁾」と、自分史の書き手を「開拓者」「創始者」と位置づけ、ゆえにその苦勞を評価されるべきものとする。「先人先輩の皆さんが開拓のために大変苦勞し、……理想郷建設に情熱を捧げられた⁽¹¹⁾」と、そこで達成されたものが、「地域作り」であるとしている。さらにはこの『自分史』を「自分史」ではなく「開拓の文集⁽¹²⁾」と呼び、生涯学習講座の主催者たちは自分史講座とその文集は「(記録を)後世に残して」いく目的で企画されたと述べるのである。

IV. おわりに

東藻琴村の生涯学習講座で作成された『自分史』は、共同体のなかから生まれた自分史である。自分史作成の共同体として社会関係の成立が認められるのである。単に講座の受講者たちが同一行政区域の住民であるということではない。社会関係は自分史の作成過程にあらわれ、自分史文集に見受けられ、読み手の反応に明かである。共同体の共通項となったのは、「開拓」や「開基」、「苦勞」など共同体の「集合的記憶 (アルヴァックス 1950)」である。それを介して成立する共同体は「想像の共同体 (アンダーソン 1995)」であろう。

この「想像の共同体」は、行政区域としての地域と照応するものとして扱われ、自分史は、「地域共同体のなかから生まれた自分史 (小林 1997 a)」として変化していく。「東藻琴村史の一頁⁽¹³⁾」としての認識も付加されていくのである。

東藻琴村の文集『自分史』は、必ずしも秀でた自分史というわけではない。けれども、決して名文とは言えない短い自分史にも、自己を表現したい意欲が行間にあふれており、書き手の人生を顧みる真摯な姿勢が読むものの心をとらえる。

この生涯学習講座での自分史の取り組みは、講座として書く機会が提供され、価値付けや基本のフォーマットなど自分史をより書きやすくする装置が用

意されることで、個々の書き手が「人生の物語」を創造することを容易にしている。自らの人生の文章表現の機会をより多くの人に開いたのである。「庶民の文章運動」としてはじまった自分史の一つの結実を、東藻琴村の自分史の取り組みと文集に見ることができよう。

注

- (1) 北九州市自分史文学賞（北九州市主催，1987年創設），日本自分史大賞（日本自分史学会主催，1996年創設），日本自費出版文化賞（自費出版ネットワーク主催，1998年創設）などがある。
- (2) 文学理論のなかで提起された「テキスト論」「読者論」と同様の視点である。
- (3) 文集発行時の作者の平均年齢は，両文集とも75才である。作者の生年は，1988年の文集では，1900年から，1924年，1995年の文集では，1906年から1930年である。
- (4) 分量は，400字原稿用紙換算で1枚以内のものから，40枚をこえるものまでである。平均は8枚である。
- (5) 東藻琴村の多くの地域は，明治末期から大正期にかけて入植者に開放された地域である。
- (6) 講座の受講者は農業に従事してきた人が多く，文章を綴ることが身近な行為ではなかった。また時代的地域的条件から必ずしも十分な学校教育うけられなかった人もいる。
- (7) 菊地慶一さんは小学校，高等学校の国語教員として活躍された方である。また生活記録運動の活動に長年とりくまれた方でもある。
- (8) 1999年2月4日，菊地慶一さんからの聞き取りによる。
- (9) 『しらかば』の1号と2号は，生涯学習講座参加者の作文集である。各文章の長さも400字原稿用紙一枚以下で，自分史の文集ほどの真剣な取り組みの姿勢と熱意はみられない。自分史を書くということが，単に作文をするのではなく，重要な意味をもっていたことがうかがえる。
- (10) 東藻琴村教育委員長「生き生きとした自分史の発刊にあたって」，東藻琴村寿大学自治会編『自分史』，東藻琴村教育委員会・東藻琴村寿大学，1988，3頁。
- (11) 東藻琴村長「自分史に寄せて」，注(10)前掲書，1-2頁。
- (12) 東藻琴村長「自分史に寄せて」，注(10)前掲書，1-2頁。
- (13) 東藻琴村長「自分史に寄せて」，注(10)前掲書，1-2頁。

参考文献

- アルヴァックス、モーリス『集合的記憶』、小関藤一郎訳、行路社、1989 (1950)、264 頁。
- アンダーソン、ベネディクト『創造の共同体』、白石隆・白石さやか訳、リプロボート、1987 (1983)、288+ix 頁。
- 色川大吉『ある昭和史—自分史の試み—』、中央公論社、1975、378 頁。
- 小林多寿子「ライフヒストリー研究の視点からみた自分史」、『現代のエスプリ 自分史』、吉澤輝夫編、338、思至堂、1995 a、29-41 頁。
- 小林多寿子「自分史と物語産業の誕生—1980 年代の動向から—」、『日本女子大学紀要 人間社会学部』5、1995 b、89-108 頁。
- 小林多寿子「賞をめざした自分史—動機の語彙と「人生」の呈示—」、『日本女子大学紀要 人間社会学部』6、1996、23-38 頁。
- 小林多寿子『物語られる「人生」—自分史を書くということ—』、学陽書房、1997 a、241+4 頁。
- 小林多寿子「戦争体験と自分史—「記憶の共同体」をもとめて—」、『日本女子大学紀要 人間社会学部』8、1997 b、127-140 頁。
- 小林多寿子「自己をつづる文化—日記と自分史の誕生—」、石川実・井上忠司編『生活文化を学ぶ人のために』、世界思想社、1998 a、209-228 頁。
- 小林多寿子「書く実践と書く共同体の生成」、『生活学論叢』3、1998 b、59-70 頁。
- 東藻琴村郷土史研究グループ編『私の開拓の歩み 第1集』、東藻琴村・東藻琴村教育委員会・東藻琴村寿大学、1977、59 頁。
- 東藻琴村寿大学自治会編『自分史』、東藻琴村教育委員会・東藻琴村寿大学、1988、226 頁。
- 東藻琴村寿大学自治会編『自分史』、東藻琴村教育委員会・東藻琴村寿大学、1995、118 頁。
- 福富部落史編集委員会『福富部落史』、福富部落史編集委員会、1974、65+2 頁。
- 部落史編集委員会『50 周年記念部落史 かみひがし』50 周年記念事業実行委員会、1985、273+2 頁。
- ブラマー、ケン『セクシャルストーリーの時代』、桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳、新曜社、1998 (1995)、413+94 頁。